

図書館だより

No. 23

●五感で楽しむ図書館

文学部長 英文学科教授 大塚 寿郎

●教えて! ソフィアンくん

～ 第6回 グループ学習室を活用しよう! ～

●図書館ツアーのご案内

●リザーブブックを知っていますか?

●図書選定委員お薦めの本 総合人間科学部 社会学科教授 田淵 六郎

●豆知識 「叢書」について



五感で楽しむ図書館

文学部長 英文学科教授
大塚 寿郎



図書館の書庫が持つ独特の匂いが好きだ。とくに古書を収納した部屋の匂いは格別である。

匂いの元については諸説ある。インク、酸化した紙、製本に使う糊。カビや埃の臭いだという人もいる。和書と洋書では匂いが違う。あの匂いが脳の奥に染み込んで、なんとなく知的刺激を受けた気分になる。

あながち気のせいとは言いきれない。フランスの作家マルセル・ブルーストの小説『失われた時を求めて』に、主人公がマドレーヌを紅茶に浸すと、その香りが引き金となって幼年時代を思い出す場面がある。それにちなんで、匂いと記憶の強い結びつきを「ブルースト現象」と呼ぶらしい。

自分の場合は、論文を書くために、書架の間を行き来し、資料を集め、ときに書庫の床に座り込んで読み込み、頭を酷使した学生時代を思い出すのかもしれない。その頃読んだことは、匂いとともに、よく覚えているような気さえする。脳が若かっただけだと言われてしまえば、それまでだが。

図書館の音もいい。静かな場所である図書館の音について語るのは意外と思われるかもしれない。だが人は静寂の中でこそ音に敏感になる。しかも完全な静寂よりも、わずかに音があるほうが集中できるのも不思議だ。

サバティカルの時に繁く通ったハーバード大学のワイドナー図書館を思い出す。その読書室は、大理石と木でできた、天井の高い、ホールのような部屋だった。話し声はないが、誰かがページをめくる音、キーボードをたたく音、ペンを落とした音、椅子を引く音。色々な音が心地よい反響とともに耳に入り、集中を助け

てくれたように思う。

大学院時代に留学したアメリカの大学では、博士論文の執筆用に、図書館内に「キャレル」という小部屋を与えられた。机と椅子のある小さな押し入れのようで、音を完全に遮断できた。ところが、どういうわけか落ち着かず、他の学生がいて音がある読書室に行くことも多かった。必死に勉強する他人の姿を見て、やる気になるという副次的効果もあったからだ。

本は読むものだから、視覚にかかわるのは言うまでもない。だが、見るのは文字だけではない。紙の本のいいところは、どの程度読んだか、進み具合を見ることができることだ。しかも「たしか、あの本のあの辺、右ページの下あたりに書いてあったな」という具合に、ビジュアルに記憶できる。電子本ではできないことだ。

このことは一冊の本にとどまらない。図書館に通い続けていると、建物全体のビジュアル・マップが頭に入ってくる。書架が視覚的に頭のなかにインプットされ、壮大な知のマッピングができる。「あそこには、こんな関係の情報がある」とか、「あの書架の下の方に、こんな色の本があって、こんなことが書いてあった」などと瞬時に頭の中で視覚化できるのだ。

図書館は確かに便利になった。歩き回らなくとも、検索すれば、必要な情報が手に入る。情報量が増え、検索の精度も上がった。だが、それとともに五感を通した知的体験が減ってしまったように思う。

こんなことを書くと、デジタル時代に乗り遅れたガラパゴス的アナログ人間の発想だと笑われそうだが、五感による記憶は、ばかにできない。本学の大学院生だったとき、「修行」と称して、今では目にするのではないカードカタログを使って、該当する本が書架にあるのをチェックし、専門分野の研究書の膨大な目録を作るという作業をさせられた。そのとき手にした本の表紙の色を今でも覚えている。五感で覚えたことはなかなか忘れないものだ。

そんな御利益がないにしても、あの独特の時間の流れの中で、図書館を五感で楽しんでみてはどうだろう。ちょっと違った知的な刺激を体験できるかもしれない。



教えて! Q&A ソフィアンくん



～ 第6回 グループ学習室を活用しよう! ～

昨年春にリニューアルしたグループ学習室。機材も整い、とても使いやすくなりました。



Q. グループ学習室って何をするとこる?

A. プレゼンテーションの準備など、数名で話し合いをしながら作業をするための部屋だよ。学習のための場所なので、サークル活動などでは使用しないでね。



Q. 誰でも使えるの?

A. 上智大学の学生や教職員のみ利用できるよ。図書館開館日であれば、土・日も利用できます。



Q. 申込方法は?

A. グループ学習室の前に、予約ボードがあるんだ。2週間分の予定表が貼ってあるので、利用したい日時の欄に自分の学生番号と利用人数を記入してね。申込みは30分単位で、連続して使用できるのは、1グループ2時間まで。**キャンセルする場合には、記入事項を消すのを忘れないでね! 申し込み後15分経っても利用がない場合には、キャンセル扱いになるので十分注意してね!**



Q. 3つ部屋があるけれど、どう違うの?

A. 部屋の設備は少しずつ異なるよ。一部屋ずつ説明するね!





まずはB103から!



B103

ココ!

爽やかなブルーを基調としたB103は、机と一体化した可動式の椅子が12脚あるよ。部屋に入って向かって右側の壁は一面ホワイトボードになっているんだ。

また、可動式のプロジェクターがあるので、部屋のどの壁にも、パワポなどの資料や映像を映し出すことができるよ!



次は明るいグリーンのB104。ここには可動式の机10台と、椅子が15脚あるよ。
プロジェクターは壁への固定式。
向かって左側の壁にホワイトボードが付いています。



電子黒板



中に入ると...

B104

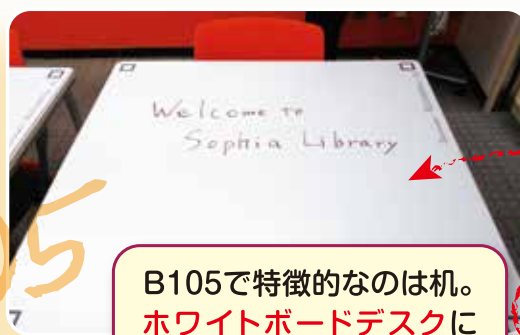
最後はオレンジのB105。ここには可動式の机4台と、椅子が15脚あるよ。
B104同様、プロジェクターは壁への固定式。
向かって右側の壁にホワイトボードが付いています。



電子黒板



中に入ると...



B105で特徴的なのは机。ホワイトボードデスクになっているんだ。スマホに専用アプリをダウンロードすれば、机に書いたデータを保存することもできるよ!





全ての部屋に共通なのが**電子黒板**！
ホワイトボードとして利用できるだけでなく、パソコンを持ち込めば、USBに入ったデータを映し出すこともできるよ！

※電子黒板として使用できるのは、ホワイトボードの部分のみです。



専用の**電子ペン**を使えば、映し出したデータへの書き込みもできるんだ。更に、書き込んだデータを、USBに保存することもできるんだよ！



使用後には、各種機材の電源を切る、ホワイトボードを綺麗にするなど、**現状復帰**を忘れずに！
基本的なマナーを守って、みんなで気持ちよく使いましょう！





図書館ツアーのお知らせ

図書館では、以下の日程で図書館ツアーを行います。図書館の主な箇所を、皆さんの先輩や図書館のスタッフと一緒にまわります。このツアーに参加すると、図書館の使い方がわかるようになりますので、ぜひご参加ください。参加者には、記念品をプレゼントします。

実施日程・時間

所要時間は各回30分程度で、同内容です(予約不要)。

実施内容

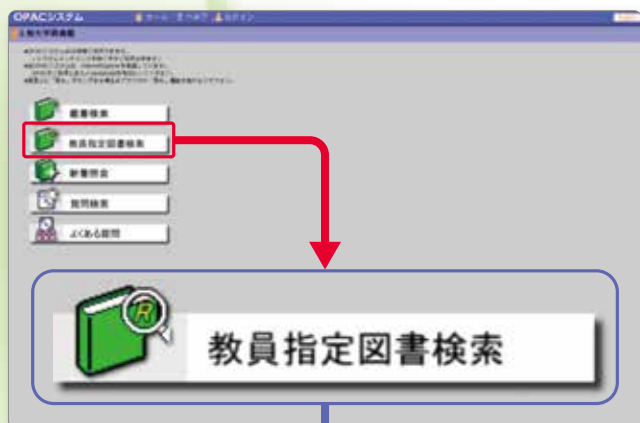
中央図書館の主要な箇所を約10名ずつのグループに分かれて見学します。

集合場所

各ツアー開始時間の5分前までに、中央図書館1階正面右側のレファレンスカウンター前にお越しください。

実施日	出発時間		
4月7日(木)	10:00	11:00	13:00
4月8日(金)	10:00	11:00	13:00

リザーブブックを知っていますか？



JOUCHI Taro: 上智太郎 をクリック!

出納 No. タイトル
01 FRS6XX00 Contemporary Italy

科目登録コード

Q. リザーブブックって何ですか？

A. リザーブブックとは、授業に必要な教材として教員から特に指定のあった資料のことです。より多くの学生が利用できるよう、貸出時間を短く設定しています。

Q. 短い時間とはどのくらいなのでしょう？

A. 資料によって2時間、24時間、72時間の3種類に設定しています。

Q. どこにありますか？

A. 貸出・返却カウンター内のリザーブブック用の書架にあります。OPACで検索すると、配架場所が「中央リザーブ」と表示されます。

Q. どうやって借りるのですか？

A. 貸出・返却カウンターで、教員名と資料名を申し出てください。職員が出納します。

Q. リザーブブックの一覧表はありますか？

A. OPACの「教員指定図書検索」から教員または資料別に検索ができます。名前またはタイトルをクリックすると詳細が見られるようになっています。

図書選定委員お薦めの本

総合人間科学部 社会学科 教授 田渕 六郎

『豚と精霊—ライフ・サイクルの人類学』(コリン・ターンブル 著・どうぶつ社)

>> 中央図書館(学部図書(地下2階)) 389: Tu75



社会学者としては、社会学の本をお薦めすべきなのだろう。が、ここで取り上げるのは人類学者による本である。もちろん社会学でお薦めしたい本は山のようにあるのだが、どれか1冊に絞るのは難しい。これまで読んだ本のなかでも数少ない、読むごとに心を揺さぶられる本であるというのが、この本を選んだ理由である。

タイトルだけ見ると、豚に関する本だと勘違いする人もいるだろう。しかし、豚の飼育法などについての本ではない。原著は英語だが、英語タイトルは The Human Cycle、つまり『人間の(ライフ)サイクル』である。主題よりは副題のほうが原著タイトルには近いわけだが、通読すると、『豚と精霊』というタイトルが原著タイトルよりも本書をよく表しているという感じがしてくる。豚が何のメタファーなのかについては、ぜひ自分で本書を手にとり確認していただきたいが、訳者である太田至さんのセンスは素晴らしいと思う。

著者のターンブル(1924-1994)は異色の人類学者である。イギリスの貴族階級の出身で、オックスフォードを卒業したが、故郷を離れ、多くの社会に暮らし、米国で亡くなった。大学教員であったのはごく限られた期間であり、本書を含め、著作の多くは一般向けであった。フィールドワークを長く行ったアフリカに関する著作が多く、彼を著名にしたのは、コンゴのイトゥリの森に暮らすムブティ・ピグミーを描いた『森の民』である。本書には、そうした人類学的フィールドでのターンブルの経験が数多く取り上げられている。

この本は、人間のライフサイクルについて、アフリカ、インド、チベットなどの伝統社会の人の生き方と生きるライフサイクルのあり方と、西欧のそれとを比較することをテーマとしている。ムブティなどの社会と西欧社会との間で、子ども時代から老年期に至る五つのライフステージのあり方や、大人になること、年を取るということという経験がどれだけ異なる意味を持つかが印象的に描かれる。とりわけ、「精霊」が社会の基底にある伝統社会において、精霊に近い位置にある高齢者たちは「賢者」などの役割を担うことで豊かな老いを生きているという指摘は、「高齢化問題」に直面する日本に生きる我々に対して大きな示唆を与える。

一般向けの著作ということもあり、本書のスタイルは、事実を客観的に記述するという、一般的な人類学のモノグラフ(民俗誌)のそれとは大きく異なっている。紹介される西欧社会の事例の多くが、ターンブル自身の人生経験であると同時に、伝統的社会的諸事実に対する評価には彼の主観や感情が色濃く映りこんでいる。しかし、むしろそうした「人間臭さ」が、本書の独特の魅力だと言うこともできる。

本書の原書は1983年に刊行された。ターンブル59歳の時の著作である。老いのとば口に立っていた彼がその10年ほど後に亡くなったことを考えると、この本は人類学者として生きた著者にとっての自伝的な意味を持つだろう。本書が(少なくとも私にとっては)今日も色あせないものである理由は、近代人として育ち、伝統社会に出会ったターンブルが、伝統社会を鏡として近代社会を批判的に捉え返しただけでなく、一人の人間として、自らの生き方においてもまた「別様にもあり得る」生の可能性を示したところにある。

本書は既に古書店でしか入手できなくなりましたが、こうした名著を手軽に閲覧できるのが大学図書館を利用できる者の特権である。学生のうちに、上智の図書館でぜひ本書を手にとり読んでいただければと思う。



本文中にある「森の民」も図書館に所蔵があります。080:C448:v.234 (学部図書(地下1階))



豆知識

「叢書」について

叢書とは、ある分野またはある主題に関連する一群の著作を、計画的に集めて出版するもので、「〇〇シリーズ」ともいわれます。中国では、叢書は南宋ごろ(12世紀)に始まり、18世紀の清代には古典の逸書や稀覯書を採訪して叢書が行われました。最大の叢書は乾隆帝の「四庫全書」1万2000余部3万4000巻で、複本を写して南北八閣に置きました(1733~82)。日本では堀保己一の「群書類従」が1600余部2000余巻として、1779年から1822年に出版されました。明治・大正までは学術的叢書が主でしたが、1927年1月改造社の「現代日本文学全集」、新潮社の「世界文学全集」のいわゆる円本(*)の発行により、叢書も大量販売時代に入って、現在のペーパーバック競争時代になりました。

中央図書館では、叢書は請求記号「080」で始まる図書です。地下1階(例:朝日選書 GAKUBU080:A822:v.0)と4階書庫(例:岩波講座現代 080:I956:v.0)に配架されています。ぜひ手に取ってみてください。

*廉価で出版された全集や双書類 参考文献:日本大百科全書(請求記号Ref:031:N715:v.14)

叡智が世界をつなぐ

上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

上智大学図書館だより No. 23

発行所 上智大学図書館
〒102-8554
東京都千代田区紀尾井町 7-1
TEL : 03-3238-3510
FAX : 03-3238-3139
発行日 2016年4月1日
印刷 三鈴印刷株式会社
TEL : 03-5276-0811